

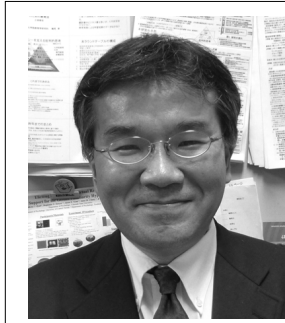


この人を たずねて

京都大学大学院教育学研究科 教授

楠見 孝氏

インタビュー
上野美果



Profile — くすみ たかし

1987年、学習院大学大学院人文科学研究科心理学専攻博士課程退学。博士（心理学）。学習院大学助手、筑波大学講師、東京工業大学助教授、京都大学助教授を経て、2008年より現職。専門は認知心理学。著書は『実践知』（共編、有斐閣）、『批判的思考力を育む』（共編、有斐閣）、『思考と言語』（編著、北大路書房）、『メタファー研究の最前線』（編著、ひつじ書房）など。

■ 楠見先生へのインタビュー

—— 卒論から研究されている比喩研究を始められたきっかけを教えてください。

私は小説を読むのが好きで、大学で文学をやろうか心理学をやろうか迷ったのですが、小説に描かれた心の問題や人が小説を読む時の面白さなどを取り扱いたいと思い、心理学を選びました。比喩研究に出会ったきっかけは、指導教授の一人であった藪内稔先生が4年次のゼミで比喩研究の本 *Metaphor and Thought* を取り上げてくださったことでした。当時はちょうど比喩研究が注目を浴び始め、心理学では認知心理学が盛んになりつつある中で心理学から比喩に光を当てようという研究が始まった時期でした。まさに文学と心理学をつなぐような新しい領域の研究なので関心をもって研究を始め、現在にいたっています。この30年間で比喩を研究する人が非常に増えてきましたし、認知心理学の発展や、心理学以外の言語学や情

報科学の分野と融合する中で進歩しています。心理学の基礎のトレーニングをしっかりと受けた上でそのようなテーマを卒論として選ぶことができ、幸せでした。

—— 博士課程を修了されてからは、どのように研究を進められてきたのですか？

母校の学習院大学の助手を務めた後に最初に就職したのが筑波大学の社会工学系という、経済学者や工学者が多い組織でした。その中で私には、心理学者というより行動科学者として幅広い研究をすることが求められました。経済学の関連で意思決定やリスク認知の研究など、新たなテーマに取り組むようになりました。リスク研究では企業との共同研究に初めて誘ってもらい、研究の幅が広がりました。

筑波大学で、意思決定研究を行っていたことがきっかけとなって、次の東京工業大学に移りました。理系の大学で心理学を教え研究していくためには心理学の良さを他の分野の研究者にアピールし

ていく必要があります。それによってすぐ鍛えられたと思います。また、工学系の脳や言語処理のプロジェクトに誘ってもらうなど工学者との共同研究ができましたし、学生たちと意思決定、比喩・類推、インタフェース、コネクショニストモデル、熟達化などの研究を進める中で、理系的なやり方で研究プロジェクトを立てていくことを学びました。東工大に在籍中、客員研究員としてカリフォルニア大学サンタクルーズ校、ロサンゼルス校でメタファーやアナロジーの研究をした経験も、研究者として大きく成長するきっかけとなりましたね。

—— 京都大学に移られてから批判的思考の研究を始められたきっかけを教えてください。

批判的思考研究は比喩研究とつながっています。比喩はレトリック（弁論術）として、古代ギリシャの時代には人を説得するための方法で、政治家が民衆に訴えかける時に使われていました。そしてもう一つ大事なものはロゴスで、論理に基づいて説得するということでした。そこで、ロゴスをどう考えるかということで批判的思考に興味をもちました。他にも、私が研究していた意思決定やリスク認知におけるバイアスをどのように修正するかという問題も批判的思考が関わっています。

また、教育学部・研究科に移って教育の問題に取り組む中で、現場での授業の実践研究をしたり、中高生に授業をしたりするようになりました。そこで中高生にいちばん伝えたかったことは、人の心は間違いやすいものなので立ち止まって考えなくてはいけないということでした。自分の考えだけに凝り固まるのではなく他の人の意見にも耳を傾けて、みんなが満足できるような決定をする必要があ

ることを伝える中で、生徒たちに批判的思考の重要性に気づいてもらうことを目指すようになりました。——先生が新たな研究を進められる時のスタイルのようなものはありますか？

最初にもった比喩に対する関心は今も続いていますし、昔の研究を捨てて次に移るのではなく、それは木の幹として残っていてそこからいろんな枝葉が生えてきているというような感じですね。また、新しいテーマを選ぶ時には、自分が面白いと思えること、そしてみんながあまりやっていないということも大事です。心理学では研究されていないけど、他の領域では始まりつつあるというテーマが私にとっては魅力的でした。私は、なつかしさやデジャヴの研究も行っていますが、これらも比喩研究とつながっていますし、面白いけれどもあまり研究されていないということが、テーマとして選んだ大きな理由ですね。

——いろいろな大学で新しい研究を始めていくことのメリットを教えてください。

やはりそれぞれの場所でとても貴重な経験ができたことですね。私は最初のうちは3～6年で大学を移っていたので、新たな環境の中でいろんな人と出会い、学ぶことがたくさんありました。そして、私がいたのが心理学科だけだったら、たぶん自分の枠組みはあまり広がらなかったと思うのですが、社会工学系や工学部にいたことが研究の幅を広げてくれたし、心理学以外の分野の人たちと出会える場で研究ができたのはプラスでした。こういうキャリアを積まなかったら、意思決定やリスク認知研究には出会えなかったですね。——新たな研究の場や研究テーマを探る若手の研究者たちにアドバイスをお願いします。

一つは、異なる分野の人と出会ったり、新たなスキルを身につけたりできるような場所を探ることが大事だと思います。そういう場所で、若い時期に良い経験を積むことができるかどうか、その後の研究人生を左右すると思います。あとは海外に行くチャンスも若いうちにつかむというのも大事ですね。

もう一つは、良い共同研究をするということ。自分の知らない知識やスキルを持つ人と一緒に研究することによって研究の幅が広がります。メインテーマはしっかり持ち続け、そして共同研究を組みながら研究の幅を広げていくというのが大事ですね。そういう意味では出会いを大切に、良い先生、仲間に出会い、共同研究者を見つけ、研究グループに入るとするのは若い人を成長させると思います。

■インタビューアの自己紹介

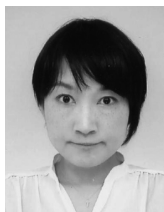
インタビューを行った感想

楠見先生へのインタビューのお話をいただき、楠見先生のご経歴や研究内容を拝見した時、心理学だけでなく社会工学系や工学部に所属されていたこと、その中で幅広い研究をされていることに興味をもちました。実は、現在私は就職活動中で、今後の所属先や研究の方向性について考えているところだったので、楠見先生のこれまでの研究人生について詳しくお聞きしてみたいと思いインタビューさせていただきました。

インタビューの中でとても印象深かったのは、楠見先生がご自身の研究スタイルを木の幹から枝葉が生えていくと表現されたことでした。インタビュー前まで私は、それぞれの研究をバラバラに捉えていたのですが、お話の中でそのつながりを理解し、まさに一本の大きな木をイメージすることができました。また、最後に若手研究者に向けていただいたアドバイスでも、自分の専門分野に限定するのではなく幅広い視野を持つことの重要性を改めて感じました。今の時期に楠見先生へのインタビューの機会をいただいたことにも感謝しております。

現在の研究テーマ

現在私は、乳児の情動や情動制御（対処行動）の発達に関心もっています。これまでの研究では Visual Cliff を用いて、乳児が高所は恐いけれど崖の向こうにいる母親のところに行きたいという葛藤状態に置かれた時、どのような対処行動を試みるのかについて検討を行ってきました。今後は Visual Cliff 場面だけに限定するのではなく、より大きな視点で子どもの情動発達について研究を進めたいと思っています。今回、楠見先生のお話をお聞きしてその思いは強くなりました。また、楠見先生のように大きな木を育てるべく、幹や枝葉の成長を支えていただけるような人や場と出会えたらと思っています。その中で私も、誰かの幹や枝葉の成長に貢献できれば幸いです。



Profile — うえの みか

2006年、同志社大学文学部卒業。2013年、同志社大学大学院文学研究科心理学専攻博士後期課程修了。博士（心理学）。同志社大学実証に基づく心理トリートメント研究センター嘱託研究員。京都府立大学、帝塚山大学、神戸親和女子大学、京都聖母学院短期大学、追手門学院大学で非常勤講師を兼任。専門は発達心理学。論文は The Organization of Wariness of Heights in Experienced Crawlers. *Infancy*, 17, pp.376-392. (共著) など。